

インタビューデータの「公開性」「非公開性」 ——「客観性」をめぐる議論から

平安名 萌 恵

(立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

普段、私たちは生活の中で、外に出かけたり、洗濯物を干したり、台風の到来に備えたりするとき、天気予報の確認を行うだろう。気象庁は、科学技術や専門的知識を駆使して天気や自然災害の発生を予測し、安全管理のための政策を打ち出す組織である。その気象庁が、組織を支える「価値」観を、どのように「制度化」しながら変化してきたのかを解き明かしたのが、若林悠が2019年に出版した『日本気象行政史研究——天気予報における官僚制と社会』（東京大学出版会）である。立命館大学生存学研究所研究プロジェクトのひとつである「生存をめぐる制度編成研究プロジェクト」は、若林氏（以下、著者）を立命館大学にお招きして、本著の合評会を行った。評者は、生存学プロジェクトメンバーの一人として合評会に参加し、著者に幾つかの質問をした。本エッセイは、合評会での質疑応答内容と、応答を受けたうえで評者自身の考察について記したものである。

はじめに、本著の内容を要約する。人々に天気予報を「信頼」してもらうために、気象庁は「専門性」に基づいて予測をしているということを、認識させる必要がある。「専門性」は、「客観的」判断を行っていることを保障するものであるとされている。「専門性」は、「機械的客観性」「エキスパート・ジャッジメント」¹⁾という価値観で構成されており、気象庁はこれらの価値を、組織の内外において「制度化」を行うことで、人々から「信頼」を集めてきた。「機械的客観性」は、統計といった定量的方法による機械的な手続きに基づくものである。例えば、気象レーダーやアメダス、気象衛星など非人格的な判断を「機械的客観性」によるとみなす。一方で、「エキスパート・ジャッジメント」は、専門家の知識や経験、自由裁量に基づいた主観的な判断を支えるものである。戦後は、気象衛星やアメダスなど科学技術の発達から、的確な予報が求められるようになった。一方で、数値的データだけでは予測できないような「さくらの開花予想」や、単なる天気予報ではない、気象予報士や「お天気キャスター」により、分かりやすく面白い解説も受容されるようになった。気象庁は、社会における天気予報に対する

「評判」を読み取りながら、「機械的客観性」「エキスパート・ジャッジメント」という二つの「価値」観のバランスを変化させる。例としては、人々の「評判」を獲得するために、1950年代に中央气象台（現気象庁）は「エキスパート・ジャッジメント」による「さくらの開花予想」を天気予報に取り入れるようになった。しかしながら、「さくらの開花予想」は「機械的客観性」を適用しにくいため、予報の誤差は回避できない。結局、株式会社ウェザーマップ社など民間気象会社に、「さくらの開花予想」をはじめとする創意工夫に富んだ天気予報を任せることで、気象庁は「機械的客観性」による予報に重きをおくようになった。本著における気象行政の歴史の変遷は、天気予報という、我々にとって日常的な「確からしい」ものが、組織と社会の相互作用を繰り返しながら構築されていく様相が提示される。「専門性」を有する組織を支える「客観的」判断には、「機械的客観性」「エキスパート・ジャッジメント」という濃淡がある。気象庁が人々の「評判」にあわせて、「客観性」のグラデーションを変化させる姿をみることは、研究者自身の「専門性」あるいは「客観性」を反省的に捉えなおす契機を与えてくれる。このような点で、本著は行政学的視点に基づくものであるが、社会学分野においても興味深い事象を議論しているのではないかと考える。例えば盛山和夫（2012; 2013）は、社会学における「客観性」概念を批判的に捉えなおす作業を行なっているが、本著は、研究者のなかで共通認識とされる「価値」観の内実を議論する際の実践的な例としても捉えることもできるであろう。

さて、評者が本著で特に興味深かったのは、気象庁関係者に対するインタビューデータの用いられ方であった。本著でインタビューデータが用いられている理由は、気象行政の根底にある組織の価値観を析出するための背景情報を取得し、その構造を把握するためであるとする（若林 2019:80）。本著では、注釈 38 で飯尾潤（2004）等の行政学におけるオーラルヒストリーの方法論を用いることの効用が述べられていた。しかしながら、本文中では、「オーラルヒストリー」という言葉は使用されておら

ず、「インタビュー調査による証言記録」(若林 2019: 80)として、それらのデータは地の文に組み込まれる形を取っていた。本著 79 頁から 80 頁にかけて、インタビュー調査をする意義は述べられているものの、著者がどのようにインタビューデータを捉えているのか、関心が深まった。なぜなら、このようにインタビューデータを用いる理由は、本著の主眼である、「専門性」を有する者達が周囲からの「評価」をくみ取りながら、データの提示の仕方を変化させていくことを、著者は、自らの研究手法にも意識した結果であるのではないかと考えたからだ。2019 年に出版され御厨貴が編集した『オーラル・ヒストリーに何が出来るか——作り方から使い方まで』(岩波書店)のなかで、著者はインタビューデータの保存・継承の方法について(若林 2019: 137-151)記していることもあって、インタビュー調査の方法論について、本人に問う必要があると考えた。

評者がそこまで、著者の方法論にこだわるのは、評者自身が研究で、ライフヒストリーのインタビュー調査を行っているからだ。評者は、2018 年度から沖縄県において非婚シングルマザーのライフヒストリーの聞き取り調査を行っている。本著は行政学の視点からオーラルヒストリーの方法論を参考にしている。政治学におけるオーラルヒストリーとは「公人の、専門家による、万人のための口述記録」(御厨 2002: 5)されており、社会学でライフヒストリーを専攻する評者の観点とは、多少のズレがあるのかもしれない²⁾。しかしながら、政治学においてオーラルヒストリー調査の対象者を、一般市民に広げると方法論を変化させる必要性(飯尾潤 2004: 22; 御厨 2004)や、社会学などの領域との関係性を再考する必要性も指摘されている(江頭 2007; 熊本 2007)。このような経緯から、政治学的視点からの方法論についても学ぶことにも大きな意義があると考え、評者は合評会において以下の質問をした。

³⁾ 質問 A 「本研究においてインタビュー資料を用いた目的と意義は何か。

質問の概要 「本著 80 頁では、飯尾潤 (2004) を引用しながら「文書資料ではえられにくい情報を得るためなど、インタビュー調査の意義などを述べているが、本研究、もしくは著者は、インタビューをすることを、研究においてどのように位置づけているのか、より詳しく教えていただきたい(インタビューを資料として保存することに、どのような意味があると考えているのか、それらの資料

を通してリアル/リアリティのどちらを知ろうとしているのかなど)。

質問 A に対する著者の応答は、以下の 2 点にまとめることができる。

1、インタビュー資料を用いた理由

インタビュー調査を行った理由は、(歴史的な背景を知るため)単に気象庁の元官僚の経歴を聞くだけではなく、人生の濃淡(人生のハイライトなど)を聞き取った。調査対象者から得られたデータは「事実」として認識している。

2、インタビュー資料の用い方について

著者は、インタビュー調査とオーラルヒストリー(もしくはライフヒストリー)調査とは明確に区別している。その線引きは、情報の公開性・非公開性にある。インタビュー資料を「オーラルヒストリー(またはライフヒストリー)」として、聞き取りの対象者の語りを引用しながら研究するのであれば、第三者がインタビューの全体像や文脈を確認できるよう、記録データを公開するべきである。本研究においては、インタビューは、「オーラルヒストリー風」に調査をおこなったが、本文中ではあえて、記録データの全体像を確認することが求められないように、インタビュー調査として、データも地の文に組み込んだりした。

著者の応答を受け、本著でのインタビュー使用法には明確な意図があることは、筆者が予想していた通りであった。しかしながら、調査対象者の語りの引用をして、それについて分析・考察するのであればインタビューの全体像を提示するべきであるという言葉には重要な論点が含まれているように思えた。ここからは、著者の応答に対する評者自身の考察を述べたうえで、インタビューデータの公開性について新たな視点を提示する。

インタビュー資料を公開する必要性は、著者のみならず、様々な社会学者たちが保存・継承の問題も含めて述べてきたことだ(江頭 2007; 熊本 2007; 倉敷 2007)。評者も、「インタビューの全文を公開する必要があるのか。全文を公開しなくては、客観性は担保されないのではないのか」という指摘を受けた経験がある。おそらく、インタビューデータの公開に関しては、オーラルヒストリー、ライフヒストリーを研究手法として掲げる研究者であれば、一度は足を止めて考える問題かもしれない。「公開す

るべき」と指摘されても、すぐには実行できずに問題化してしまうのは、それらの研究は、調査対象者との関係性に強い影響をうけるということにある。「語りの場合は、語らない、語れない場としてだけでなく、語りたくないものをつい語ってしまい、語りえないものを語ろうとする場としても機能している」(奥村・桜井 1991: 276)とも言われているように、調査対象者が思いもよらず話してしまうことは度々ある。それゆえインタビューを終えた後に、調査対象者から、データを使わないで欲しいとお願いされることはある。また、データをどれくらい公開するかどうかは、研究者の立場性にも左右され、調査対象者とのラポール関係の在り方にも大きな影響を与えるだろう。このように、データの公開が簡単にできないからこそ、調査対象者や研究者の主観性がどれほど入り込んでいるのか確認することが困難であり、調査対象者の語りが「事実」であるかどうか議論され続けてきているのであろう。特に、研究者が調査対象者との関係性を、常に問い続けられる「マイノリティ」の語りのデータについては、公開にあたり、即断してはならないし、慎重に議論を続ける必要がある。

ここで、評者の調査における経験をふまえて、インタビューデータの公開性における議論の展開に向けて、新たな論点を提示したい。その論点とは、「データの公開性」をだけでなく、「データの非公開性(もしくは不(可)公開性)」そのものを問い直すということだ。評者はこれまで、沖縄県において非婚シングルマザーのライフストーリーの聞き取り調査を行ってきたが、去年、データの公開性について深く考えるきっかけとなる調査対象者と出会った。その方はインタビュー調査への協力を許可してくれたものの、実際に面会しようとするや連絡が途絶えるなど、直接お会いするまでに時間がかかった。インタビュー自体はとてもうまくいった。しかしながら、インタビュー後、その方から「データを一切公開しないでほしい」という要望を受けたため、今後も論文等には引用することはしないと決めた。データの非公開を求める理由を聞いたが、最後まで、はっきりとは分からなかった。

その方が話したことは、既存の枠組みを変える可能性のある重要なものであった。しかし、データを全く公開しないままで議論すると、客観性は担保されることはない。語りから示された意味を受け止めるだけで、評者自身の中にとどめるしかないのだろうか。それでも、その方の人生における喜びや悲しみの経験や、自らに向けられる周囲や社会からのまなざしに対する不満を話してくれたことには、何か理由があるのだろうか。

評者はこれらの疑問に対する答えはまだ出ていない。ただここで考察したいのは、「オーラルヒストリー(あるいはライフヒストリー)によって得られたデータを公開しないこと」は、質的調査にとって必然的、本質的ともいえる要素があるのではないかと、いう点だ。それは、対象者が語った後に公開を拒むまでの一連の行為それ自体のなかに、対象を理解するための何かがあるのではないかと、いうことである。別のいい方をすれば、「公開されなかった語り」には対象者を理解するための社会的な意味があるのではないかと、いうことだ。その場合、調査対象者の理解から「社会のあり方」を解き明かそうと試みる社会的調査方法と、行政機関のような制度的あるいは「社会的なもの」としての行政機関を研究する本著の調査方法との間の溝は何かも含めて、考えなくてはならない。もちろん公開することを許可された語りだけで研究を継続することは十分可能であるし、また実際に語られたことを越えた主張を行うことは常に慎重であるべきだ。様々な点で勉強不足であるのは承知のうえではあるが、このことについては今後も問い直し続けるだろう。

以上、著者の著書と合評会を通して、「データの公開性」問題について改めて向き合うことができた。さらに、「データの非公開性」という、これまでとは異なる視点を示すことができたと考える。ここで、再度、著者に問いたい質問がある。近年、行政学と社会学のオーラルヒストリーの在り方は近接しているようにも思える。そのことについて、何を考えるか。そして、行政学側の視点から、「オーラルヒストリー」研究としての情報の非公開性を考える時、何を言えるのであろうか。

【注】

- 1) 本著では、これら二つの定義は、科学史家の T.M ポーター (Porter Theodore M) の議論を基に提示されている。
- 2) ここでは、ライフヒストリーとオーラルヒストリーの「口述の記録史」という共通性に注目しているため、それらの異なりについてはここでは重きをおかない。
- 3) 9月28日の合評会の会場にて、評者が配布した資料から引用している。

【参考文献】

- Alessandro, Portelli, 1991, *The Death of Luigi Trastulli and other Stories from and Meaning in Oral History*, New York: State University of New York Press. (朴沙羅訳, 2016, 『オーラルヒストリーとは何か』水声社.)
- 江頭説子, 2007, 『社会学とオーラル・ヒストリー——ライフ・ヒス

- トリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に』『大原社会問題
研究所雑誌』585: 11-32.
- 飯尾潤, 2004, 「政治学におけるオーラル・ヒストリーの意義」『年
報政治学』55: 21-33.
- 岸政彦, 2018, 『マンゴーと手榴弾』勁草書房.
- 熊本博之, 2007, 「オーラル・ヒストリー研究の現状と沖縄研究にお
けるオーラル・ヒストリー」『琉球・沖縄研究』1: 9-20.
- 倉敷伸子, 2007, 「女性史研究とオーラル・ヒストリー」『大原社会
問題研究所雑誌』588: 15-27.
- 御厨貴, 2002, 『オーラルヒストリー——現代史のための口述記録』
中央公論新社.
- 御厨貴, 2004, 「特集にあたって」『年報政治学』55: 3-7.
- 御厨貴編, 2019, 『オーラル・ヒストリーに何ができるか——作り方
から使い方まで』岩波書店.
- 奥村和子・桜井厚編, 1991, 『わたちのライフヒストリー——笑顔の
陰の戦前・戦後』谷沢書房.
- 桜井厚, 2005, 『インタビューの社会学——ライフヒストリーの聞き
方』せりか書房.
- 盛山和夫, 2012, 『社会学とは何か——意味世界への探求』ミネル
ヴァ書房.
- 盛山和夫, 2013, 『社会学的方法的立場——客観性とはなにか』東京
大学出版.
- 谷富夫編, 2008, 『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界
思想社.
- 若林悠, 2019, 『日本気象行政史研究——天気予報における官僚制と
社会』東京大学出版会.